

同窓生シリーズ

38



第29回生 大貝隆之氏

1982年 中央大学経済学部国際経済学科卒業/海外経済協力基金(OECF)入社/業務第1部業務第4課(海外投融資)/総務部資金課/業務第1部業務第2課(インドネシア担当)/OECFジャカルタ駐在員事務所(駐在員)/業務第1部業務第2課(課長代理)(インドネシア担当)/OECFバンコク駐在員事務所(次席駐在員)/業務第1部企画調整班(参事)/総務部広報課(課長)(現職)

貧困撲滅への挑戦

私は昨年、人間の尊厳、権利を守るといふことの意味、人間として生きて行くことに元氣と自信を抱かせてくれた、ある方と出会いました。この機会にその方のご紹介させて頂きたいと思ひます。

私は日本の政府開発援助(ODA)の中でも円借款を担当する海外経済協力基金(OECF)に勤務しています。海外駐在(ジャカルタとバンコク)の6年間を含め、今年で18年目。気がついて見ると、母校新宿高校を

卒業してからもう20年以上が過ぎていふことになりました。現在OECFの「広報」を担当しています。皆さんは10月6日が「国際協力の日」であることを存じでしょうか。それに関連して、毎年フェスティバルとシンポジウムを、外務省、国際協力事業団(JICA)をはじめとするODA関係諸機関と共に実施しています。昨年のシンポジウムはOECFが企画し、国立大学にて開催されましたが、その基調講演者として招聘したのが、バン

グラデシユのグラミン銀行という「貧困者のための銀行」の創設者であり総裁であるムハマド・ユヌスさんでした。

ユヌスさんは、貧困緩和の効果的な手法としていま世界的に注目を浴びている「マイクロクレジット」と呼ばれる「貧困者向けの無担保小額貸付」の生みの親と言われています。それまで一介の大学教授であったユヌスさんが、グラミン銀行を創設したのは、バンングラデシユの銀行が貧困者には信用力(担保、保証等)がないという理由から、貧困農民12世帯に対する27ドルの融資さえ拒んだことに端を発します。

彼は、まず自らが保証人となり、10村、20村、50村と貧困農民に対する貸付を行い、それらは農民からきちんと返済されて行きました。しかしその成果を見ても、銀行は貧困者に対し貸付を行おうとはしませんでした。そしてとうとう、1983年に彼は自ら「貧困者のための銀行」グラミン銀行を創設するに至ったのです。今では、バンングラデシユの農村の半分以上(返済率は98%)で、また世界申約60か国(その中には先進国も含まれている)で、このマイクロクレジットが導入され、貧困者を救っています。

OECFも1989年にこのグラミン銀行へ30億円の支援を実施しました。「貧困とは貧しい人々が作り出したものではなく、我々が作り上げたシステムによって作り出されたものです。従ってそのシステムを改善することに

よって貧困という非人間的な状況はなくすことができるのです」というのが彼の主張です。彼は言います。「ライト兄弟が12秒の飛行に成功してからわずか65年後には、人類は月に行きました。貧困も同じ様に、私たちが生きている間に地上からなくすことができるはずですよ！」

「貧困」という言葉には縁遠くなつてしまつた感じのある日本及び日本人にとってはあまりピンとこない問題かも知れませんが、世界の人口(約58億人)の内、現在でも約10億人は貧困の状況(人間として尊厳を保ちつつ生きて行く最低限の生活水準が保たれていない状況)にあると言われています。また、4年前の阪神淡路大震災の被災者や現在の国内大不況における失業者の方々を考えると、貧困の状況というものは今もって先進国

においても存在するし、その対応と言うものは人類全体の課題であると思えるのです。

ユヌスさんの偉業は、貧困緩和という人類最大の課題を施しや慈善事業ではなく、クレジット(貸付)という金融的手法を用いて実践して見せたことにあります。ある意味では、日本の現在の金融機関の「貸渋り」状況に対する警鐘を鳴らしているようにも思われます。日本の若い世代に、こうした問題についても一層関心を持ってもらいたいという気持ちから、今年の1月に母校新宿高校で後輩の皆さんにお話させて頂く機会を頂き、メッセージを送って頂きました。今後、この様な分野においても新宿高校の卒業生の皆さんが一層活躍されることを期待しております。